

伊豆の長八美術館からの手紙

松崎町の建物に残る長八作品—その2. 風水図柄で鍍絵を制作した山光荘

伊豆の長八美術館漆喰文化アドバイザー 齋藤 金次郎

この山光荘は松崎町松崎280にあり、屋号山光荘から付けられています。1968年に発刊された、つげ義春の「長八の宿」の漫画のモデルや横溝正史原作のドラマの舞台となったことでも知られています。建物は明治期に造られ、現在は旅館となっていますが、当初は造り酒屋であった。醸造工場はありませんが、今でも主屋の2階には杜氏（とうじ）が寝泊まりした部屋が残っていると言う。主屋を中心に、付属した建物の外壁は海鼠壁の大壁仕上げの塗屋造りとなっており、一見蔵造り風に見える（写真1）。しかし、裏面に回ると一部洋風造りも見受けられる。長八の作品は裏庭にある土蔵と主屋玄関入った囲炉裏がある所に、晩年の傑作明治20年（1887）73歳の時に製作した塗額「寒牡丹」、漆喰塑像の胴が亀で頭が蛇の「宝来亀」明治9年（1876）及び「達磨大師像」明治6年（1873）が残っている。

ここでは、裏庭にある土蔵の長八作品について述べることにする。鍍絵の製作年代は明治16年頃とされています。外壁は海鼠壁仕上げで内部1階は板の間で、2階は3畳と8畳間のふた間続きで、窓側には床の間がある座敷となっています（写真2）。土蔵は伊豆半島地震で屋根瓦と海鼠壁の修繕を行い、外部に新たに柱を添わせたとのことである。しかし、これまでの地震や災害で長八作品のみ被害がなかったと言う。長八の鍍絵は西側の窓の霧除けの軒裏に四方睨みの龍と真ん中の柱に登り龍、そして窓戸前小壁に阿吽（あうん）の虎と竹が施され、その裏に天祐居士の落款が施されている。また北側の小さな窓の持送り内側に雀、外側には雲形の漆喰鍍絵が描かれ、日本古来の和風の図柄でまとめられている（写真3、4、5、6）。一般的に長八は雨水や湿気が多い外部また陽光のあたる外部には退色を避けるために彩色を行わないのが普通であるが、ここでは窓

廻り部分に漆喰で華やかな大理石を模した擬石塗り技法を用いています（写真7）。これまでにないデザインで造り上げていることに特徴が見られます。この擬石塗りは、地元の伊那下神社の明治9年（1876）の「伊那下」の塗額が代表的である（写真8）。現在残っている中で、建物での技法としては、初めて試みている。因みに、この擬石塗りの技法を応用して、長八は「火鉢」を製作し、明治10年に東京上野公園で開かれた第1回内国勸業博覧会に出展しますが、当時の金額で50円の値段が付く評価を受けます。この技法は明治建築と同時期に西欧から導入されたもので、主に室内の暖炉や柱等の仕上げとして行われ、当時の左官工事のなかでも高級な技法であった。その技法を長八は否定することなくいつ早く取り入れた証しである。また山光荘の作品は風水の図柄で表現されているのも特長的である。風水は古代中国の思想で我が国でも古くから都市の開発や建物の位置及び間取り等を決める時に用いられています。戸田の松城家は風水によって決めたとされています。今回の松城家修理工事では確認できませんでしたが設計・施工は伝承によると長八が担当したということから考えると無関心ではなかったものと考えられ、この山光荘でそれを漆喰彫刻で実現した



写真1 正面



写真2 土蔵2階長八の間内部



写真6 西側持送りの雀



写真3 窓戸前阿吽の虎・天井四方睨みの龍・柱登り龍



写真7 漆喰擬石塗仕上げ



写真8 伊那下の塗額



写真4 落款印章



写真5 窓戸前右側阿吽の虎

ものと思われます。開くところによると、四方睨みの龍・阿吽の虎と雀は雨降りや湿気が多い時にはピンク色に見えると言う。改めて長八の作品へのこだわりと演出力を実感することができる。また機会があったら詳しく述べたいと思う。尚、山光荘は宿泊者のみ見学可能となっております。今回の調査では、飯田昌子氏・松崎町役場企画観光課課長八木氏及び一般財団法人松崎町振興公社事務局長関氏にお世話になりました紙面を持ってお礼申し上げます。

参考文献

- ・松崎町 海鼠壁のある建物 平成14年9月 松崎町教育委員会
- ・土の絵師伊豆長八の世界 2002年11月 村山道宣